



草加市制60周年記念

国指定重要無形民俗文化財

淡路 あわじ

人形浄瑠璃

にんぎようじようるり

人が舞い、
人形が踊る

人形浄瑠璃の
解説もあるよ

草加公演 2018

草加市文化会館ホール

東武スカイツリーライン(東武伊勢崎線)「獨協大学前<草加松原>」駅東口徒歩5分
※ご来場の際は、公共交通機関をご利用ください。 埼玉県草加市松江1-1-5

¥ 一般 2,500円 友の会 2,000円

小・中学生 500円

友の会先行発売 1.16[火]10:00~
全席指定 / 未就学児入場不可

同時開催
淡路島
物産展

2018.

5.19

土

14:00開演(13:15開場)

プレイガイド

草加市文化会館(チケット専用) 048-931-9977
東武よみうりチケットセンター 048-987-0553
新屋堂 草加マルイ店 048-922-6536
草加市物産・観光情報センター 048-921-1800

チケットぴあ [Pコード:483-946] 0570-02-9999
ローソンチケット [Lコード:31824] 0570-084-003
イープラス <http://eplus.jp/>
カンフェティ <http://www.confetti-web.com/>

チケット 一般発売 2018. 1.20 [土] 10:00~
発売 (草加市文化会館 電話予約 翌日 10:00~)

アーク <http://ark.on.arena.ne.jp/>

主催/公益財団法人草加市文化協会 後援/埼玉県 草加市 草加市教育委員会 NHKさいたま放送局
◆この公演に関するお問い合わせ 草加市文化会館 048-931-9325



【出演】

淡路人形座



【演目】

戎舞 よひのひめ
伊達娘恋緋鹿子 だてむすめこいひがのこ
火の見櫓の段 ひのみやぐらのだん

播州皿屋舗 ばんしゅうひらやぶ
青山館の段 あおやまやかたのだん

淡路 あわじ

人形浄瑠璃

にんぎょうじょうるり

草加公演 2018

出演
淡路人形座



淡路人形浄瑠璃は500年の歴史を持ち、文楽の源流でもあります。国指定重要無形民俗文化財に指定されており、日本の演劇史で大きな役割を果たしてきました。淡路人形座は、国内はもちろんのこと、国外でも数多くの招待公演を行っています。

伊達娘恋緋鹿子
火の見櫓の段



お七

戎舞 えびすまい

五百年の歴史を誇り、国指定重要無形民俗文化財でもあ
る、淡路の人形操りの始まりについては、様々伝承されて
いますが、中世時代、摂州西宮（現在の兵庫県西宮市）の
戎かきと呼ばれる芸能集団と交流があったことが起源とさ
れています。戎かきとは、西宮戎神社の信仰を広めるため
に、戎神の人形を舞わせてお祈りをし、戎のお札を配つて
歩いた芸能民のことです。江戸時代の書物には、淡路島に
もこの芸能民の流れがあったと記されており、これが今日
まで伝わったのが「戎舞」です。淡路島でも昭和初期まで
この伝統が続き、各家に配る座本名の入ったお札も現存し
ています。

福の神・戎様が庄屋の家にやってきて、振る舞い酒の杯
を重ね、生い立ちなどを語って舞い、その後船で沖に出て
大きな鯛を釣りあげるといってお話です。

かつては、淡路の漁村の人形芝居では必ず上演され、釣り
上げる鯛に本物の鯛を使うこともありましたが、
戎様がお酒を飲む時に、開催地の特性を
折り込んだ語りの場面もありますので、
ぜひお楽しみください。



戎様

伊達娘恋緋鹿子 だてむすめこいのひかのこ
火の見櫓の段 ひのみやぐらのだん

一般的に「八百屋お七」として知られています。江戸時代前期、
江戸本郷を舞台に、実在した八百屋の娘をモデルに描かれたとさ
れています。井原西鶴の浮世草子『好色五人女』に書かれて以来、
歌舞伎や浄瑠璃などで多く取り上げられ、脚色されてきました。
その中でも「伊達娘恋緋鹿子」は、浄瑠璃の演目として全八巻
で構成され、主としてこの六巻末尾の「火の見櫓の段」だけが上
演されてきました。お七の一途な恋心と、若い娘の火刑という凄
惨美が人々の関心を掻き立て、この事件をもとに、多くの文芸作
品が生み出されました。

近江の国・高島家の若殿左門之助が禁裏に献上する天国（あま
く）の剣を紛失したため、お守り役の安森源次兵衛は切腹しま
した。江戸吉祥院の寺小姓となつて剣を探す安森の二子吉三郎は、
火事で焼け出されたお七と恋仲になつていましたが、お七は、父
が店の再建のためにお金を借りた万屋武兵衛を婿に迎えなけれ
ばなりません。剣詮議の期限の日、お七は剣を盗んだのが
武兵衛と知ります。しかし、当時は九つの鐘（午前0時）を合図
に江戸の町々の木戸が閉まり、通行が禁じられていたため、たと
え剣が手に入っても、今夜中に届けることが出来ねば、吉三郎は
切腹することになります。思いつめたお七は、火の見櫓の半鐘を
打てば、火事と思つて木戸が開かれるのではと考えました。火刑
を覚悟で、雪の凍りついた梯子を滑り落ちながらも、櫓に上がり、
撞木（しゅもく）を夢中で振り続けるのでした。

播州皿屋舗 ばんしゅううつさらやしき
青山館の段 あおやまやかたのだん

お菊の幽霊が、二枚、二枚、三枚……と皿の数を数えるシ
ーンが芝居や映画でよく知られています。ところは播州姫路。
室町時代、細川家の国家老・青山鉄山は、忠臣を装いながら管
領・山本宗全と共に、細川家の乗っ取りを企んでいました。そ
んな折、細川家の当主・巴之介は、お家の重宝・唐絵の皿を紛
失したため、將軍の不興を買い、流浪の憂き目に遭います。山
名に追われた巴之介は、姫路城下の青山鉄山の下屋敷に匿わ
れることとなります。果たして、鉄山の陰謀やいかに……

場面は、青山鉄山の下屋敷。鉄山・忠太兄弟が、巴之介を毒
殺せんと一計を案じていたところ、細川家の家臣・舟瀬三平の
妻のお菊にその話を聞かれてしまいます。そこで、鉄山はお菊
が預かる家宝の皿を二枚かすめ取り、皿の足りないことを理由
にお菊を惨殺して、死体を井戸に投げ込みます。すると、にわ
かに雨が降り出し、死してもなお悪事を夫に告げんとするお
菊が、井戸の中から幽霊となつて現れます。そこに三平が駆け
つけ、悪事を見抜いて鉄山を討ち果たし、ついに皿を取り戻し
ます。



播州皿屋舗 青山館の段
お菊